

2018年度第1回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

戦災者住宅に住むようになって一週間後、隣の部屋に賑やかな一家が引っ越してきた。

晩御飯を食べようとしていたときだった。部屋の仕切りの板壁の向こうから、荷物を運び込む音、ガタガタ床板を踏み鳴らす下駄の音がしたので、引っ越してきたことがわかった。

「わっ、ええ匂いしてる。隣の家、御飯炊いてるみたいや。お米の御飯を食べたいなあ」

という男の子の声がしたかと思うと、

「そんなこというても米なんか買えんのやからしやあないやろ。イヤやつたら食べんとき！」

と甲高い母親らしい声に混じって子どもの泣き声が聞こえてきた。Hは、壁越しにこれほど隣の会話や音が筒抜けに聞こえてくるとは思っていなかったのだ、啞然としていた。

「隣、何人おるんやろう？」と母親の敏子がいったとき、Hは彼女が何を考えしているかすぐわかった。話し声から推定すると、十一、二歳の女の子を頭に、次は男の子、一番下が五、六歳の女の子だった。小母さんの声は聞こえても、大人の男の人がいる気配はなかった。

「四人家族やなあ。挨拶代わりにお握りでも作って持って行ってあげよう」と、敏子がいった。

「それが、愛やというんやろうけど、毎日食わせてやれるんか？ これから毎日期待するかもわからんで。ずっと続けられんことはせんほうがええんやないか！」**1**Hは苛立つていった。

敏子は黙ったまま、炊きたての釜の御飯を、火傷しそうなになる掌を水で冷やしながら握り始めた。気がつく、隣の声がピタッとやんで静かになった。こちらの様子がわかったらしく、握りメシが運ばれてくるのを待っているのだ。

驚いたことに、仕切りの壁の隙間を塞いだ紙に穴が開けられ、二個ずつの目玉が並んでこちらを見ていた。Hはカッとして仕切り壁に座布団を投げた。一瞬目玉は穴から消えたが、すぐ元どおり壁に並んだ。少し高いところにある目玉は、どうやら母親らしかった。

敏子は、できあがった握りメシを持って隣の部屋へ行った。

「これ食べてください。お隣になった挨拶の代わりやから、遠慮せんと食べて」「すみませんなあ。米の御飯なんかずっと食べてえへんから、嬉しいわ」

「わーい、食べてええのん？」「一つずつ食べなあかん。両手に持たんでも取りあげへんがな」

子どもたちのはしゃぐ声と食べる音が、まるで同じ部屋の中のように聞こえてきた。

帰ってきた母親は、「お隣さん喜んでつてや」と嬉しげにいった。Hが「受くるより与うるは、幸いなり」というと、敏子は「そうよ。使徒行伝第二十章の三十五節や」と応えた。

Hは、母親に**X**を込めていったのに、彼女は逆に息子が理解してくれたと思つたらしい。

「田舎からもらつてきた米も残り少のうなつてきてるといふのに、何を考えるんや！」

とHは爆発寸前の声をだした。その声に、好子はオロオロしてHと母親の顔を見ながら、

「私は田舎ですつとお米食べてたから、お兄ちゃんにぎょうさん食べさせてあげて」といった。

「好子の分まで食べとらない！**2**はくはそんなこというてるんやないんや！」と怒鳴つた。

父親が一言も発言せず、黙っていることにもHは腹を立てていた。

「お父ちゃんはどう思うんや？」と問いかけると、盛夫は狼狽したような顔で、「そうやなあ」とだけいった。「なにがそうやなあや？」と詰めるHに、父親は困つたように視線を外した。

Hは、ドアを開けて外に飛び出した。

「お兄ちゃん、出ていかんと待ってて。もうすぐまた御飯が炊きあがるから。お兄ちゃん！」

と叫ぶ好子の声を聞きながら、東門から表へ出て電車通りの方へ走った。腹がへつていたが、炊きあがる御飯をじつと待っている自分が嫌だった。

「たしかにお袋がいう、愛は間違っていないかもしれない。でもケチなほくにはできない。もしほくが同じことを無理にやったら、それは偽善や」Hは独り言のように思いながら、大正筋の白川薬局のほうへ向かった。

薬局の小母さんが、「薬のポスターの古いのがあるからあげる。その裏を使つてポスターを書いたらどうや。店の壁に貼つてあげるわ」といつてくれたのを思い出したからだ。

白川薬局の夫婦と、Hの両親が親しかったのは、同じ広島県から神戸に出てきた同郷人だったかららしい。その縁で、Hの家族の面倒をよくみてくれた。戦災者住宅で開店した、妹尾洋服店の第一号のお客も、この夫婦の紹介

だった。

白川薬局の次男の白川昭夫は、Hの一年先輩で、かつて二中入試の口頭試問の傾向を教えてくれたことがあった。その後、彼は体を悪くして一年休学したので、Hと同級生になった。

体が大きいので「百貫」という仇名があった昭夫くんは、まだ家に帰っていなかった。

「もうすぐ昭夫も帰ってくるから待つとり」といわれたが、3Hは辞退してポスターだけもらって急いで薬局を出た。晩御飯はまだのようだったからだ。もし「食べて行つたら」といわれれば、いつもならこれ幸いとご馳走になったかも知れないが、「今日は困る」と思った。(中略)

家に帰ると、もう夕飯は終わっていて、Hの分だけ残してあった。おかずは鯛の塩焼だった。

母親が、「サバは一匹で三円もしとつた。高うて買えんわ」といつているのが聞こえた。

Hは黙って白米の御飯を噛みしめながら、本当に米はウマイと思った。鉄の釜で炊いた米はアルミ鍋で炊くよりも味が抜群によかった。家の台所にあった釜は、空襲で焼けてガリガリになってしまったが、いま炊いている立派な鉄の釜は、羽田野の小父さんが残してくれた物だった。釜の蓋も昔どおりの分厚い木の蓋だったから、なおうまい具合にふっくら炊けるのだろう。

そんなことをぼんやり考えていたとき、聞き捨てならない両親の会話が耳に飛び込んできた。

「新聞をとるのをやめなあかなあ」と、相談をしていたのだ。

Hは、箸をおいて、両親を睨みながらいった。

「新聞をとるのをやめる？ 絶対に嫌やで！ ぼくは新聞を毎日読みたいんや！」

Hの剣幕に、二人は驚いたのかちよつと黙つたが、母親が言いわけをした。

「ほんまは新聞やめとうないんやけどなあ。お父ちゃんが消防辞めて月給が五百円ほど入らんようになったから大変なんや。背広の仕立ての注文があったら、一着千五百円ぐらい入るんやけど、いまは仕立て直しや修繕ばかりやから、五円の新聞代でもきりつめんなあ」

母親がHに向かってしゃべっていたが、父親は無言だった。Hは父親が何かいつてくれるのを期待して、じつと顔を見た。しばらく黙っていた父親が、ゆつくり口を動かした。

「ミシンを買うと五千円はする。うちのミシンは焼けたけど、今は元気よう仕事をしてくれてる。このミシンが動いてるんは、あんたが空襲のとき持ち出し

てくれたお蔭や。そやから新聞はミシン代やと思うことにして、新聞はやめんとこう」

その言葉に、4Hは久しぶりに父親を感じて、嬉しかった。(中略)

隣が静かだったので留守かと思つたら、また板壁にこつちを見ている目玉が並んでいた。どうやら子どもたちだけがいるらしい。きのう破られた穴を塞いでおいたのに、また新たに破られて、その穴の数も前日よりさらに多くなっていた。Hはムカツとして、頬ばかりかけたパンを投げ出すようにおくと、仕切り壁に突進した。すると目玉は素早く消えた。

「こんど穴を空けて覗いたら、そつちへ行つて殴るぞー」と大声で脅しながら、Hは急いで鉄で紙を切り、糊をベタベタ塗って穴を塞いだ。

ところがすぐ子どもたちは、貼つたばかりの紙にプスプスと指を突きたて、またあちこちに穴を開けた。三人の子どもたちは、「腹へつた。腹へつた」とわめいたかと思うと、急に黙つた。Hの動きを全部見ながらやっているのだ。Hはイライラしながら気味が悪くなつてきた。なんだか手におえない化け物と戦っているような気がしてきたからだ。それを見た敏子が、

「堪忍したり。今日炊事場で聞いて知つたんやけど、お父さんは戦死して女手一つで育ててるんやそやや。六間道の道端で団子を売ってるんやけど、たいした商いにならんから、食べるのもやつとやというつた。子どもが腹をすかしての無理ないわ。我慢したり」といった。

子どもたちはその声を聞いているのか、ときどき「うん、そや」と相槌を打つた。

Hは、一家四人がこの仮設住宅に住むことで、久しぶりに安らいだ暮らしができるのかと思つていたが、その期待は見事に裏切られた。それは隣にイライラする家族がいるということだけではなく、母親との間がギクシャクするようになったからだ。

彼女の信仰心は、空襲を受ける前よりさらに強くなり、困っている人に、私は何をしてあげられるやろう？ と自問自答し続けているような感じをみせていた。

何に対しても愛を説く母親と、それに疑問を持つHとの間は、崩壊寸前だった。

Hには母親の思いに同意も理解もできなかった。

父親が無気力になったことのほうが、まだ多少は理解できた。戦争中に父親が考えていたことに間違いは一つもなかった。戦争が終わつてから、世の中は民主主義一辺倒になってきたが、彼はずつと前から民主主義者だったのだ。ところがこんどは、今まで戦争に疑いを持たず賛同していた人たちが、急に民主

主義を唱え始めたのをみて、「そうだ、そうだ」ともいえなかったのだろう。たぶん、今までの反動で急に生まれた民主主義の波を、あまり信用できないからだ。だから彼は、何に対しても黙ったままだったのかもしれない。

Hは父親と違って黙っておれず、やたらに苛立っていた。

大久保が、ときどき変になることがあるHを見て、

「お前なあ、あんまり考えんほうがええんと違うか。固う考えてたらポキッと折れるで。柔道の受け身やないけど、体が硬いと骨が折れる。近ごろのセノオは危のうて見てられへんぞ」

といった。「そうかもしれないなあ」とH自身も思った。

戦争中の自分は川の中に立っている樺杭のような感じがしていた。最初は川の流ればゆるやかだった。でも、戦争が始まってから、どんどん流れが早くなり、樺杭はなんとか流されないように立っているのが精一杯だった。ところが、終戦の詔勅の日に激流が急にピタツと止まったかと思うと、こんどは流れが百八十度逆になった。今までと全く反対の方に流れ始めたのだ。

Hは、人々はこれからどうするのかと見ていたら、見事に流れに従ったのだ。それはHが海に潜っていたときに見た若布のようだった。若布は、潮の流れに逆らわないで揺れていた。でも、根っこは岩についていた。若布のように生きたほうが自然なのかもしれないのだ。

「でもぼくはアカンなあ、5若布になれん。また流れに逆らって立っている樺杭になつてもうた」

とHは思った。野村にも、学校へ一緒に行く途中でいわれたことがあった。

「あんなあ、セノオの家は特別やったんや。普通の人は、みんな戦争中は何も知らんと戦争しとったんや。戦争が終わって、初めて知ったことがぎょうさんあったんで、これからは考え方を変えなあかんあと思うたんや。そういうことやないか？ あんまり哲学するなよ」

Hは、そんなのが、哲学なのかとビックリした。

「哲学いうのようわからんし、哲学してるつもりもあらへんけど……。民主主義いうのはぼくの望んでたもんやけど、みんなが急にいいだしたんで、ホンマかいな？」という感じが強うて、なんやスツキリせんで困つとるんや」と応えた。

(中略)

その夜、6Hは夢を見てうなされた。でもそれが、夢なのか現実なのか全くわからなくなつて、大声を出して暴れてしまった。

壁にピッシリとラムネ玉のような目玉が張りついていて、それが全部Hのほうを睨んでいた。Hが逃げようとする、素早く全部の目玉が一斉に動くのだ。その目玉は、子どもではなく大人の眼だった。とにかく物凄い数の目玉の集

団だった。それがどンドン繁殖し増え続けた。

突然その目玉が壁から離れ、Hのほうへ飛んできた。顔にぶつかりそうになるほど接近したかと思うと、急に消えた。執拗な目玉の襲撃が恐ろしくて、夢なら早く覚めてほしいと思った。

でも、だれかに体を押さえつけられているのか動けなかった。やっと起き上がったHが、この目玉の襲撃は夢かどうか確かめようとしたら、まだ目玉が部屋の中を飛んでいるのが見えた。「ワーツ」と声を出したとたん、隣の仕切り壁に全部の目玉が吸いこまれ、消えてしまった。

Hの大声に、家族が起きただけでなく、隣の子どもたちも起きたらしい。

「どうしたの？ 夢見てたんか？」と好子がいい、母親が「お隣に悪いがな」といった。

Hが、隣の仕切り壁を見ると、目玉が動いていた。本当にこつちを見ている目玉だった。

またHは「ワーツ」と叫んでしまった。そして仕切り壁をドンドンと握り拳で叩いた。

頭が割れるように痛かった。

(妹尾河童『少年H』下巻「講談社」より)

問1 傍線部1「Hは苛立っていった」とありますが、「H」は母親の隣人に対するふるまいをどのような態度だと受け止めていますか。解答欄に合うように本文中より二字で探し、書き抜きなさい。

問2 X に最適なことは次から選び、記号で答えなさい。

A 真心 I 軽蔑 U 拒絶 E 同情 O 皮肉

問3 傍線部2「ぼくはそんなこというてるんやないんや！」について、次の問に答えなさい。

①「そんなこと」とはどういうことですか。最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 妹の分まで奪うほどにお腹が空いていて、どうしてもお米を食べたいということ。

I 田舎に疎開しなかったため、自分は隣の子どもたちよりも白米を食べていないということ。

U 年長者が優先されるべきなので、妹が兄に自分のお握りを差し出すのは当

然だということ。

工 妹のご飯をあえて横取りすることで、母親の行いが間違っていると強く示したいということ。

オ 握り飯を食べたいということ自分を自分で直接母親に言うのではなく、妹を通して伝えるべきだということ。

② この時の「H」の気持ちの説明として、最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 隣の家に優しくしたいと思いつつも、母親に文句をつけてしまう自分に嫌気がさしている。

イ 家族の貧しさをかえりみずに、貴重なお米を他人に厚意であげてしまう母親に不満を抱いている。

ウ 自分が誰よりも家族のことを大切にしているのに、誰も理解してくれないことを不快に思っている。

エ 母親が実の息子である自分よりも、隣の子どもたちのほうを大切にしているのをやるせなく思っている。

オ 幼い妹がその場の空気の悪さに気づいて何とかしようとしているのを見て、自分自身を情けないと感じている。

問4 傍線部3 「Hは辞退してポスターだけでもらつて急いで薬局を出た」とありますが、その理由として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 仲がよい家族の様子を見て、いたたまれなくなつたから。

イ 興奮している気持ちで、絵を描くことでまぎらわしたいから。

ウ ポスターが未完成なのに、ご飯を食べるわけにはいかないから。

エ 親友に相談しなかったが、どう話していいか分からなかったから。

オ 夕飯をご馳走になつて帰つたら、家族に対して決まりが悪いから。

問5 傍線部4 「Hは久しぶりに父親を感じて、嬉しかった」とありますが、普段はどのような態度の父親でしたか。解答欄に合うように本文中より三十字で探し、書き抜きなさい。

問6 傍線部5 「若布になれん。また流れに逆らつて立つてる棒杭になつてしまった」とありますが、それはどういうことですか。「若布」、「棒杭」がそれぞれ誰のどういう態度を表しているかを明らかにしつつ、三十字以上三十五字以内で書きなさい。

問7 傍線部6 「Hは夢を見てうなされた」とありますが、本文全体をふまえた上で、ここから読み取れる「H」の説明として不適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 得体の知れない目玉のしつこい襲撃に対して、何もできずに恐怖心を抱いている。

イ 自分一人だけが周りとは違う価値観におちいついて、どうしようもなくなっている。

ウ 自分の行動を見て楽しんでる隣の子どもたちに対して、激しいにくしみを感じている。

エ 目玉の存在が夢かどうかも分からなくなつてしまふほどに、混乱した状態になつている。

オ 誰も知らない不特定多数の人間に見張られているような気がして、とても不安に思っている。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

① いじめは人間社会に普遍的なことだといえますが、じゃあなぜいじめが起こるのかといえば、これもやっぱり、根源的には、わたしたちがみんな〈自由〉に生きたいと思つているからです。

わたしたちはどうしても、生きたいように生きたいと思つてしまふ。つまり、〈自由〉に生きたいと思つてしまふ。

でも、それをなんらかの形で阻んでくるものがあります。それが他人の存在です。

他人がいるから、わたしたちは思うがままに生きられない。そこでわたしたちは、そんな他人を排除しようと思つたのです。

それがあからさまで大規模な暴力になると、戦争です。ねちねちこそそそやると、いじめと呼ばれます。

明確な利害やaゾウオが、戦争のおおもとです。

一方いじめは、多くの場合「なんとなくムカつく」から起こります。あるいは、人をいじめることで、「自分が強くなった気になれる」「快感を得られる」というのも一つの理由です。

そしてこのいじめの底にある気分も、つまるところ〈自由〉への欲望にあるのです。「なんとなくムカつく」というのは、その相手のせいで、自分が気持ちよく生きられない、つまり生きたいように生きられないということです。「自分が強くなった気になれる」「快感を得られる」というのも、人より上位になるこ

をもつ人間だけが、その力がないために「生きたいように生きられない」という、自分への不満を抱えてしまうのです。

いじめをする人が、いじめに走る時まず抱く感情、それは、さつきもいったように多くの場合「ムカつく」です。「あいつ何かムカつく」。この感情が、人をいじめへとかり立てます。

なぜ「ムカつく」のか。その奥底の理由は、実のところ、相手に対する不満やいらだちにあるわけではありません。だれかを「ムカつく」といっていじめをする人は、本当は **C** ムカついているのです。

たとえば、親からの高すぎる期待に応えられないかわからない。先生からはいつも、なんでこんな問題もわからないんだといわれつづける……。自分への不満や、人から受け入れられていないんじゃないかという不安は、ちよつと大げさないうと、世界全体に対する「ムカつき」を生んでしまいます。何だか何もかもがムカついてしまうのです。

何もかもが満たされて幸せな時、わたしたちは、たとえば町でだれかと肩がぶつかったつて、「この野郎」と目くじらを立てることはあまりないはずですが、なんとなく、今の自分に不満がある、今の環境に不満がある。そんな時、わたしたちはそのいらだちを、思わずだれか別の人に向けてしまうのです。

子どもや若者だって、大人以上に毎日の生活に苦しさを抱えているものです。親のいうことを聞かなくなやいけなかったり、クラスでは人間関係のいざこざが起こつたり、テストや受験のプレッシャーにさらされたり、将来どうすればいいのかわからないと不安があったり……。けつこうなストレスです。

そんな時、たまたま「ムカつく」クラスメイトが目にとまる。小突いてみたりイヤがらせをしたりしてみたら、なんとなく自分のほうが強くなった気になれる。そうすると自己不十全感からちよつとだけ解放された気になれる。

繰り返しますが、自分に余裕があったり、満足したりしている時は、そうそうだれかにムカついたりしないものです。だれかをいじめて自分の力を確かめようなんて、思う必要ありません。

だから、だれかにムカついていじめてやろうと思うその根本には、実は自身に対する不満、つまり自己不十全感があるのです。

4 いじめが起こるもう一つの理由は、「逃げ場のない教室空間」です。

一つの教室に、三〇人や四〇人の生徒たちが毎日顔つき合わせて生活する。もともと気の合う仲間同士が集まったわけじゃない。中にはどうしても好きになれない友人や、話すのさえ怖いクラスメイトがいることだってあるでしょう。

でも子どもたちは、よつぼどのことがないかぎり、そんな教室から逃げ出すことが許されません。

もし、教室からもつと簡単に「逃げる」ことができたなら。もし、いじめをしてくる生徒との人間関係を、上手にかわしていくことができたなら……。いじめ問題は、もつともつと **C** コクブクしやすくなる。わたしはそう確信しています。

けれど大人たちは、多くの場合、逃げちゃいけない、困難に立ち向かわなきゃいけない、なんていいます。先生は、「みんな仲良くしなさい」などという。よく、かつていじめを受けていた子が、大人になって格闘技のチャンピオンになったとか、有名な社長さんになったとかいって取り上げられます。そしてインタビュに答えています。

「2 いじめに負けるな、立ち向かえ！」

……どうでしょう？ やっぱわたしたちは、いじめから逃げずに立ち向かうべきなんでしょうか？

はい、その通り、「一般化のワナ」です。

立ち向かったほうがいい時もあれば、逃げ出したほうがいい時もある。

わたしたちはそう考えるべきなのです。そしてだからこそ、学校は、子どもたちが逃げられるような道も、ちゃんと用意しておくべきなのです。

「生きる力」といいます。たしかに、人と仲良くできることは人間関係における「生きる力」だと思います。困難に立ち向かえることだって、とても立派な「生きる力」です。

でもまた同時に、「深刻な危険からは逃げる」「どうしても合わない人をうまくやりすぞ」ということだって、とても切実な、そして現実的な、「生きる力」だといえます。

社会に出ても、どうしても合わない人と一緒に仕事をしなければならぬということもしょつちゆうです。そしてもちろん、そういう人ともなんとか仲良くしようとするのはたいせつだし必要です。

でも、それでもどうがらばつてもうまくいかないことだってある。無理に仲良くならうとして、かえつてお互い傷つけ合つてしまうこともある。

そんな時重要なのは、上手に距離をとつて、うまくやりすぞです。それは別に、恥ずかしいことでも敗北でもありません。深刻な争いを避ける知恵なのです。

大人たちは、社会生活を営みながら徐々にそうした知恵を身につけます。そして社会は、学校に比べれば、どうしても合わない人をうまくやりすぞことが、比較的やりやすい場所です。

もちろん、大人たちだって、そのほとんどが日々人間関係に悩んでいます。どうしても合わない人をやりすぞすることができず、ノイローゼに陥つてしま

うことだつてしばしばです。

でも学校に比べれば、大人の社会にはまだたくさん「逃げ場」がある。仕事の間関係がつかなくても、学生時代の仲間と会ったり、趣味のサークルに入ったり、家族との休日をすごしたりすることができる。

大人はその気になれば、イヤな人間関係に縛られることなく、いろんな人たちとつきあうことができるのです。あるいはできるだけ人とかわらないこともできるのです。

ところが学校はどうでしょう。毎日同じ空間を共有しなければならぬ子どもたちにとって、どうしても合わない友人、いじめをしてくるクラスメイトたちを、「うまくやりすぎず」ことは物理的にむずかしい。

多くの子どもたちにとって、学校は生活の大部分をしめる場所です。そして逃げ場のない教室は、子どもたちにとって、文字通り「ここにしか居場所がない」場所です。そんな学校や教室がいじめの場所であつたら、自分を苦しめる場所であつたら、それはもう、まさに逃げ場のない地獄というほかないでしょう。

だからわたしはいいたい。居場所ほんとはここだけじゃないのだと。いや、むしろ、「居場所はここだけじゃない」と思える仕組みを、学校はもつともつとつくっていく必要があるのです。

〔苦野一徳『勉強するのは何のため？ 僕らの「答え」のつくり方』〕

〔日本評論社〕より

問1 傍線部 a と c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 本文中から次の一文が抜けています。どこに補つたらよいでしょうか。最適な箇所を探し、その直前の十字を書き抜きなさい。

いじめはなくせませす。

問3 **A** に最適なことばを、本文中より十一字で書き抜きなさい。

問4 傍線部1「問い方のマジック」とありますが、どのようなところが「問い方のマジック」といえますか。解答欄に合うように、四十五字以上五十字以内で説明しなさい。

問5 **B** に最適なことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア どのような場合でも法律にもとづいて、厳しく対応するという

イ 状況に応じて両者を使い分けたり、さらには組み合わせたりする
ウ どのような場合も相手のことを思い遣つて、穏便に対処するという
エ 状況に応じては闘うが、対処できなければその環境から避難する

問6 **C** に最適なことばを、本文中より五字で書き抜きなさい。

問7 傍線部2「いじめに負けるな、立ち向かえ！」とありますが、これは「一般化のワナ」だと考えられます。その理由の説明として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 年長者の言うことは参考にすべきだと、多くの人々が考えてしまつて

イ 多くの人が考えていることを、自分の考えだと思い込んでしまつて

ウ 学校で教わることは間違つてはいないと、有名な人たちが思い込んでしまつて

エ 自分だけの限られた経験を、他の人にもあてはまるものとして考えてしまつて

問8 点線部「いじめをできるだけ起こさせないことはできるし、そのための仕掛けはつくれるし、だからそうやって、いじめをなくしていくことはできるのです」とありますが、筆者は学校がどのようなことをすれば、いじめをなくしていけると言っていますか。最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自由の相互承認を教える
イ いじめを罰する厳しい校則を作る
ウ 精神修養をする道場を作る
エ 他にも居場所があると思える環境を作る

問9 意味段落①～④の構成として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。



